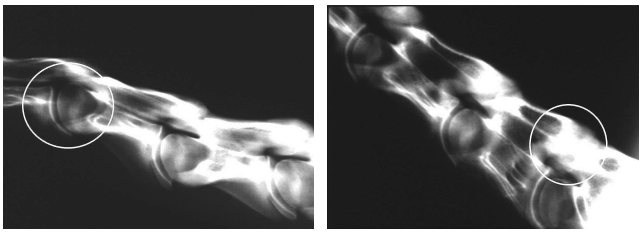
# 軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート19

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

## 健康管理と獣医療技術
### ― DOD発生状況調査，「腰痿症」 ―

馬のいわゆる「腰痿症」（Cervical vertebral malformation, Wobbler syndrome）は，頚部での脊髄の病変によっておこる「腰フラ」「運動失調」等の症状を示す神経性の疾患とされていますが，その機序は，頚椎の変形による脊柱管の狭窄であることがわかっています。よって「腰痿症」は，頚椎のレントゲン撮影で脊柱管の狭窄を確認することにより診断され，その部位のレントゲン画像は，球節や腕節で見られる「骨端症」と同様の，関節が変形・腫大している像が認められます。ですから「腰痿症」も，「骨端症」と同じく，DOD（発育期整形外科疾患）として分類されています。



○印の関節は，その前後の関節と比較して，変形・腫大が認められる

今回は「腰痿症」について，その発症時期を調べた結果，興味のある事実がわかりましたので紹介します。

2006年から2010年の「腰痿症」と診断されている症例（246頭）の発症時期を示したのが図－１です。同様に，骨折とか捻挫といった事故によって跛行を呈する症例（1585頭）の発症時期を示したのが図－２です。

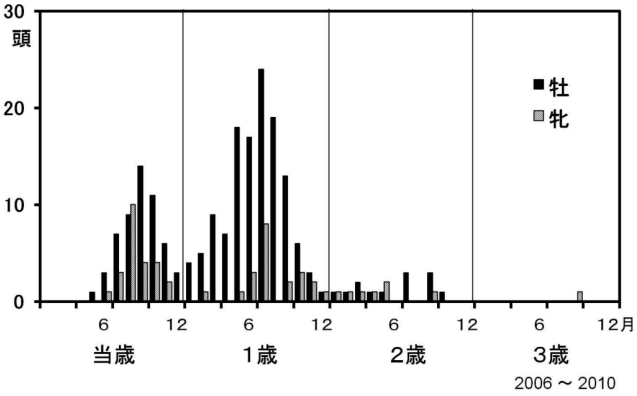
「腰フラ」「運動失調」を示す原因は，いろいろ考えられますが，すぐに思いつくのは転倒や激突といったアクシデントによるものでしょう。しかし図－１，図－２を見ると，そういったアクシデントで起きる骨折・捻挫といった事故の発症時期とは異なっているのです。仔馬は元気に飛び回り，成長に伴って事故は増え，冬の間は多少減るものの，１歳春から夏には再び増加し，個別に調教・馴致をする秋頃から落ち着きだし，事故は減っていきます。一方「腰痿症」の発症は，理由は分かりませんが，冬の間はあまり発症しません。冬はあまり激しく動かないので，「腰フラ」に気がつかないのではないか，という意見もあるかもしれませんが，それにしては違いが明確です。

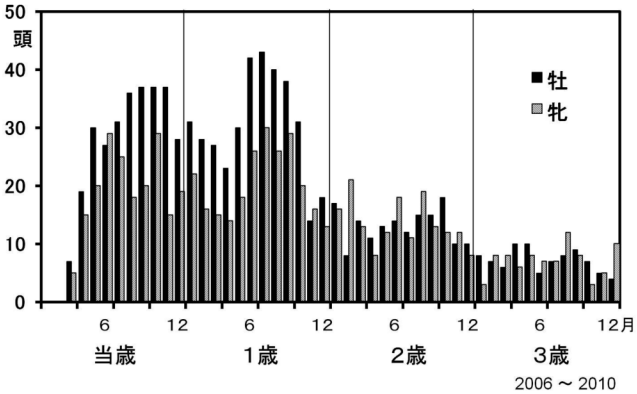
また図では牡・牝での違いも示しました。事故の発生頭数は，牡のほうが僅かに多いのですが（57%　897：688頭），「腰痿症」は圧倒的に牡のほうが多いです（78%　193：53頭）。そして特に興味深いのは，「腰痿症」では，発生頭数の多い２つの山のうち，当歳時の山は牡・牝で差は比較的少ないのですが，１歳時の山は，牡ばかりが急に増えているという事実です。そして結局「腰痿症」は，牡に多い疾患ということになっていました。

「牡馬で「腰痿症」が気になるのなら，去勢をするとよい。」という説もありますが，なるほどと頷けるところもあります。ただし，どのような馬が「腰痿症」に気をつけるべきなのか，いつごろ去勢をすればいいのか，あるいは当歳で発症する症例では，去勢の効果はあるのだろうか，等々，様々な疑問もあります。皆さんはどう考えるでしょうか。

これからも，DODの発生状況に関する情報を紹介していきます。１つの牧場，１人の獣医師等の経験では気がつかないようなことですが，牧場の飼養管理技術の向上に役に立ってくれればと思います。

図－１　「腰痿症」の年齢別・月別の発生頭数




図－２　骨折・捻挫事故の年齢別・月別の発生頭数